

京都が、
KOGEIする

K

Y



工芸

第42回京都工芸美術作家協会展

T

O

会期：令和5年3月14日(火)～3月19日(日)

会場：京都府立文化芸術会館 1・2階展示室

ごあいさつ

京都工芸美術作家協会は、戦後の昭和21年に設立され、工芸美術のさまざまな分野の作家が公募展や会派の垣根を越えて集まる、芸術文化の地、京都ならではの稀有な団体です。

京都工芸美術作家協会展は、昭和51年度に初開催し、今回が第42回展となります。

日本の第一線で活躍中の染織、陶芸、漆芸、金工、人形、ガラス、木工、七宝、石宝、皮革などの多様な分野の作家の作品をご覧ください。

近年は海外からの招待を受けることも多く、上海の展覧会に協会として参加、一昨年秋には東京の松坂屋上野店にて「京都工芸美術作家協会展@東京—京都が、KOGEIする—」と題して、文化庁の御支援を受けて開催した展覧会が好評を博しました。

コロナ禍により、3年間でむなしく過ぎたように言われることもありますが、じっくりと自分を見つめ直す機会に巡り合ったと考え、臆せず、積極的に京都の工芸美術を国内外に伝え、日本の文化芸術の振興に寄与できればと願っております。

結びに、このような時節に最大限の配慮を重ねて、無事開催の運びとなりますこと、御協力いただきました関係各位に心から御礼申し上げます。

京都工芸美術作家協会 理事長 羽田 登

ごあいさつ

京都は、長い歴史と豊かな文化的風土を背景に多彩な文化芸術を育み、その伝統を現代に受け継いでまいりました。なかでも、工芸美術はその時代の新しい技法を取り入れ、伝統と現代を融合させながら発展してきました。

京都工芸美術作家協会におかれましては、昭和21年の創立以来、部門や会派を超えて工芸美術の振興と発展を目指す作家団体として、染織、陶芸、漆芸、金工、人形、ガラス、木竹、七宝など、多岐にわたる分野の作家が集まり、京都のみならず日本の工芸美術の発展に多大な貢献をされているところであり、羽田理事長、歴代の役員はじめ会員の皆様方の御熱意と御努力に深く敬意を表します。

本展におきましても、会員の皆様の卓越した技術と感性に裏付けされた個性豊かな作品が多数出展されており、それぞれの多彩な表現や意匠に施された美意識を存分に感じ取っていただけることと存じます。

京都府といたしましても、いよいよ目前となりました、明治以来初めての中央省庁移転となる文化庁の京都移転を契機に、「文化の都・京都」の実現に向け、文化庁との連携をいっそう強め、日本が世界に誇る伝統や文化・芸術の価値を国内外に発信してまいりたいと考えておりますので、引き続き皆様方の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

結びに当たり、京都工芸美術作家協会のますますの御発展と、会員の皆様の今後ますますの御活躍を心から祈念いたします。

京都府知事 西脇隆俊

出品リスト

染織

阿部 緑	「思い出」
荒井利恵子	「Ka・gu・ya」
荒谷いずみ	「Enjoy ためしの鎖まで」
伊砂 正幸	「Sunrise」
伊砂 新雄	「雪花」
伊藤 千晶	「クリスマスローズⅦ」
井上 由美	「Changing Faces」
井俣 慶人	「鶏頭」
上原 晴子	「額「青い空」」
氏家未香子	「水の記憶」
大住 由季	「knife」
大手 裕子	「KOTONOHA 2023」
荻野美穂子	「鶯譜」
小田 芽羅	「時を刻む」
加藤 栄美	「悠久の詩」
加藤 由起	「苗族の女」
金井 大輔	「時の風景」
河崎 晴生	「information」
川辺美津子	「春愁」
日下部雅生	「型絵耀変銀箔彩色額「記憶の痕跡」」
草間 喆雄	「双翼」
久保田繁雄	「森の響きⅡ」
蔵田 和枝	「記憶のそれから」
倉渕奈千子	「Untitled」
近藤 卓浪	「カレイに月齢圖」
斎藤 高志	「放春花」
堺 映祥	「のどかな春の日」
佐藤 良三	「流転」
澁谷 和子	「六曆」
嶋田久美子	「Melody」
清水 弘祥	「湖国の朝」
清水 みわ	「暖かい場所に落ちていく」
白河 英治	「天目染「雪梅」」
埴田みさこ	「雪蛭」
高谷 光雄	「静謐」
竹花富美子	「春を待つ」
立松 功至	「BIRD SONG」
田中 紀子	「習作」
谷 美巴子	「平和の歌をうたいたい」
丹下 雄介	「名古屋帯「彼岸花」」
寺島 利男	「光の輪」
内藤 英治	「五月の頃」
中井 貞次	「雲行き」
長尾 紀壽	「南風」
中未田万里	「輪舞曲・秋知愛」

中西 秀典	「奇跡の旋風」
野田 睦美	「村夜」
羽田 登喜	「手描き友禅染名古屋帯「春を思う」」
羽田 登	「染名古屋帯「春」」
林 塔子	「土の雫・2」
樋上さや子	「陽春の湖」
樋上 千哲	「母仔「一と時」」
平谷悠律子	「絣織着物「爽」」
細見 巧	「刻」
本田 昌史	「百徳キモノ」
松本 健宏	「瀧景」
三原サダ子	「想」
山出 勝治	「月待山(東山三十六峰の内第十峰)」
横山喜八郎	「飛揚」
吉田 匡廣	「御嶽山」

陶芸

赤沢 嘉則	「AURA 交趾モザイク皆具」
猪飼 祐一	「灰釉彩壺」
市川 博一	「刻」
井出 照子	「層位」
稲澤 隆生	「松函涼炉揃」
井上 路久	「風景」
今井 眞正	「朱雀形香爐」
今井 政之	「象嵌彩窯変有明葛花瓶」
上田 順康	「花器」
潮 桂子	「釉裏紅「水盤」」
内山 政義	「雨滴文壺」
永樂 而全	「波濤に鶴 食籠」
江口 滉	「遊」
小川多佳子	「薫風」
小川 文齋	「いざ！行かん」
奥村 博美	「緊縛ノヘンコ」
片山 雅美	「赤白耀彩陶書具」
加藤 敬	「線刻紋器「月白」」
加藤 丈尋	「waterfall」
河合 徳夫	「山帰来」
河野 榮一	「宙船」
北村 美音	「嘯き鬼」
京谷 美香	「陶 2023」
清水六兵衛	「未来の記憶 23-A」
國松 万琴	「ウズベキスタンの椅子」
久保 良裕	「カンブリア:ラストワン」
慶野ことり	「三様」
高坂嘉津幸	「Landscape」
河本 匠司	「黒釉流水文扁壺」

小林 英夫 「曙」
 桜井 智子 「アスカラノコト…」
 櫻井 靖子 「Vertical Flower」
 柴田 良三 「線象嵌染付花瓶」
 新宮 克美 「空」
 杉瀬 公美 白陶「KINOKO」
 諏訪 蘇山 「練込青瓷曙茶壺」
 高野 好子 「tangara—タンゴを踊る人」
 武田 直之 「花奏」
 竹村 智之 「新たな旅立ち」
 谷口 正典 紫紅彩「華」鉢
 谷口 良孝 「光のカーテン」
 丹下 裕史 「Dizzy」
 張 義明 「宙」
 辻 勘之 「疫病撃退奇獣」
 堤 展子 「春のしずく」
 トレーシー・グラス 「お神酒礼水器シリーズ」
 中塚 佐一 「未来への螺旋」
 西 貞幸 「いつの日かあの頃のように」
 西岡みどり 「線」
 西川 勝 「壁うさぎ」
 西川 光男 「彩泥銀彩花器」
 西村 直城 「緑土象嵌線紋壺」
 長谷川恵美子 「揺らぎ」
 林 侑子 「翔」
 ピーター・ハーモン 「青白磁遊び網代文三方合子」
 昼馬 和代 「揺らぐ」
 藤野さち子 「黒の形象」
 藤平 寧 「唯あるや 美し 良ろし」
 伯耆 正一 「JOMON」
 丸田 憲良 「熔」02
 水野 靖之 「土に帰る」
 森本 真二 「燦耀」
 山本由紀子 「刻まれた沈黙」
 横山真理子 「空 景色」
 吉川 充 「赤い絵の器」
 吉村 楽入 「桜尽くし 組皿」
 涌波 蘇嶺 「飛青瓷花瓶」

漆 芸

井上絵美子 「游」
 入澤あづさ 「ににふに—羽音—」
 栗本 夏樹 「星のかけら B」
 中野 順二 乾漆筒「静輝」
 服部 一齋 玉虫飾箱「翠泉」
 林 玖瞳 「Be here」

藤井 收 「希の刻」
 三木表延斎 「朱根来塗流線花器」
 宮木 康 「そら」
 村田 好謙 「ジュエルドロップ」
 望月 玉船 「芽ぶき」
 安井 友幸 「地球の息吹」

金 工

今井 裕之 「水精赤富士」
 海野 雲雄 「花瓶」
 小泉 武寛 「むかし昔」
 竹影堂榮真 「赤銅香爐春秋火舎」
 山本 啓二 「ボタン」

人 形

天野 明美 「Crecent」
 岡 弘美 「アクア」
 岡本 祥吾 「天睨剣—白影—」
 芝原かをる 「明日」
 島田 耕園 「花の風」
 大黒ひさゑ 「緑洲」
 面屋 庄甫 「雨宿り」

ガラス

黒田 敬子 「朝やかに力強く」
 徳力 竜生 「IMAGINE」
 光久 弘子 「ギボウシの花咲く頃」
 山田えい子 「海が鳴る」
 山本 佳子 「Moon Seed Project—孵化—」

木 工

大矢 一成 「風を盛る(海風、山風)」
 角田 誠治 「風妒先」
 建田 良策 「Standing Desk R2」
 村山 明 「櫻拭漆卓」

七 宝

松本由紀子 「ノブドウ」

石 宝

ぐり 友里 「秘密の花園—姫の宝箱—」

皮 革

生田 淑子 「ホ短調響々」

染色

現代の染色工芸は多様な表現方法がある。布に図を染める方法として主に防染と捺染に分けられる。防染では糊染、蠟染、絞り染等があり、糊染は東洋独自の染色で、糊を防染に用い、手描き、型染がある。蠟染は絞り染と共に古代より世界各地に見られ、絞り染は布や糸をしばる事による防染法である。捺染は糊に染料を加えて染色する方法であり、シルクスクリーン型、型染、手描等がある。

最近では染料や染色素材が多様化し、技法も複合化し、表現者の独創性が見られる。

織

経糸と緯糸が交わって作られる織は、糸を染めてから織る、いわゆる先染が多い。織ることは単純であるが、そこから無限の可能性を含んでおり、綴織、緋織、紬織などがある。現代の織は、織る、組む、編む、絡めるなど以外の技法も使われ、素材も多種多形である。その表現も平面のものから空間のための造形まで、多岐にわたっている。

陶器

陶土は山野から直接採掘精製した粘土である。それを原料とし、成形、焼成する。一般に素地は耐火性が強い、ため、焼け締まりが弱く、したがって吸水性があって不透明である。唐津・萩・益子・信楽・越前・常滑・瀬戸・丹波・薩摩など、産地名によるもの、また、志野・織部・黄瀬戸・天目等、釉薬の種類によるものや、作者が独自に開発した技法もある。展示されている作品には、このような伝統的手法を踏まえ、独自の創意を盛り込んだ個性的なものが多い。

磁器

原料となる磁土は、流紋岩が熱水により変質した陶石を微粉碎し、水を加えて粘土状にしたものである。それを原料に成形する。その特徴は、主として素地は白く、半透明で、陶器にくら

べて堅く、吸水性がなく、叩くと金属音を発する。代表的な作品には、染付、青磁、白磁がある。

漆芸

漆の木から採取する樹液が“漆”である。精製された漆は、堅牢で美しい天然の塗料であり、同時に優れた接着剤である。この二つの性質を最大限利用して漆工芸品が創り出される。漆工芸は、木・竹・紙・布・皮・金属・陶器などを素地として、これに塗装と加飾を施す。古来、素地に木材を使うものを木胎、竹を籃胎、紙を一閑張、皮を漆皮、布を乾漆、金属を金胎、陶器を陶胎と称する。主な種類は、髹漆・蒔絵・彩漆・螺鈿・平脱・彫漆・蒔髹・存星・沈金等である。

金工

金属工芸品を大別すると、彫金・鍛金・鍍金の作品にわかれる。

〈彫金〉

彫金は金属表面に鑿で文様を彫ったり、透かしたり、他の金属を嵌めたり、レリーフとして打ち出したりして加飾する技法である。その技法の中には、毛彫り・蹴彫り・片切彫り等がある。

〈鍛金〉

鍛金技法を大別すると、鍛造・鎚起・絞りである。鍛造は、赤熱された鉄材を鎚で展伸して形成する。鎚起は、打ち上がった地金を木型の中に打ち込み碗状にし、次に金床の上で鎚打ちし、成型していく。絞り技法は材料を当て金に当て、金鎚で鎚打して絞り込みながら成型する方法である。

〈鍍金〉

熔解した金属が注ぐ容器、即ち鑄型通りに固まるということを用いたのが鑄金技法である。はじめから金属を加工するのではなく、木・粘土・石膏・蠟等で原型をつくり、これをもとにした鑄型に熔解した金属を鑄込むのである。

人形

人形は素材的に多様で、土・木・紙・桐塑・布などが自由に用いられる。これは、使用している素材や使用目的で分類されている他の工芸と大きく異なる。今日では、金属やプラスチックなど様々な素材が使用される。

ガラス

ガラスは珪砂・鉛丹・ソーダ・カリ・アルミナなどの原料を1300℃前後の熱で溶かし、成型、加飾する。成形、加工法は、宙吹き（吹きガラス）、キャスト、パート・ド・ヴェール、フュージング、スランピング、バーナーワーク、ランプワーク、積層ガラス、スタンドグラス、カットガラス、サンドブラストなど様々で、複合的に使い分ける。種々の色ガラスは、ガラス工芸を一層華麗なものにしている。

木工

木工は、針葉樹、広葉樹、唐木等の素材を用い、その素材の硬軟、疎密、色の濃淡、木目の有無等を考慮し、制作意図に合った技術により作られる。基本的な技法は、指物、刳物、挽物、曲物、彫物（丸彫・板彫・透彫）、木象嵌（木画・寄木）等到大別されている。

七宝

七宝は、主として金属素地にガラス質の釉薬を800℃前後で焼きつけながら装飾する技法のひとつである。技法では有線七宝と無線七宝があり、使用する釉薬も不透明・透明・半透明釉、また、金属素地に彫金あるいは切り透しなどの加工をして釉薬を焼き付けるなど、技法は多様である。

截金

截金は金箔やプラチナ箔を数枚焼き合わせ、細長い線状に竹刀で一本ずつ截り、膠液に布海苔を入れて糊を作り、素地である木、絹地、和紙、漆器、陶磁器、ガラスなどに、直線・曲線を描く

ように置く技法である。丸形や菱形など様々な形に切ったものも用いる。仏像彫刻をはじめ、宗教美術、茶道具、室内装飾品、装身具などに見ることができる。

皮革

現代の革工芸は、革のもつ強靱性・柔軟性・弾力性等の持ち味を生かし、染める・切る・縫る・編む・レリーフ等様々な技法が駆使されている。

硯

鉱物そのものを素材とした造形を硯彫刻と呼ぶ。素材は多岐に及び、水晶、紫水晶、紅石英、瑪瑙、玉髓、碧玉・赤玉石など石英という鉱物がよく使われる。他に翡翠、ラピスラズリ、トパーズ、アクアマリン、トルマリン、ネフライト、蛍石など多岐に及ぶ。成形にはダイヤモンドや炭化珪素など硬い素材でできた研磨材や、グラインダーやリューター、細工台など回転工具が使われ、仕上げにはダイヤモンドのほか酸化クロムや弁柄等で磨き上げられ、宝石としての耀きを得る。

竹工

現在、竹工芸に用いられている竹は、真竹・女竹・黒竹・寒竹など20種類ほどである。籠の編み方は、六つ目編みである甲羅編み、四つ目編み、甲羅編みをくずして三角編みにした鱗編み、あぜくら組などがある。編み上がったものを植物染料により着色することもあるが、漆を用いて着色することが多い。

和紙

和紙の原料は、楮・三桮・雁皮が主に使用され、代表的な製法は溜漉きと流し漉きの2種類がある。



工芸美術の技法や素材の
詳しい解説はコチラから→

THE 42ND KYOTO KOGEI ASSOCIATION EXHIBITION



京都工芸美術作家協会

で検索

<http://kogeikyoto/>

京都工芸美術作家協会・京都府



京都府